

「世界の中の北海道」―日ロ関係を軸に考える

竹 中 英 泰

北海道命名一五〇年事業の基本姿勢のひとつに、「世界の中の北海道」という視点で未来の姿を見据える」というのがある。幕末・明治期から今日まで帝政ロシア・現ロシアと対峙する蝦夷地・北海道は、昔も今もその最前線の利害と結びついて東進・南下する帝政ロシアが日本人の漂流民を通訳に幕府との通商を求めることから始まっていた。

一七九二年、勅使ラクスマンは、アリューシャン列島に漂着した大黒屋光太夫らを引き連れて根室・箱館で幕府との交渉に入り、将来の長崎での交渉を認める信牌を受け取って引き上げた。時の老中・松平定信は、いづれ国後島を交易地に加える構想を持っていたが、直後に失脚しロシアからの来航も遅れに遅れ構想は頓挫した。一〇年ぶりの帰国となった光太夫らは帰国を訴え続けることが功を奏した。

一八〇四年、信牌を持参する勅使・レザノフは、漂着民四名を伴って長崎に来航した。交渉は半年もの足止めの上成果の無いままカムチャッカへ戻らざるを得なかった。これを機にロシア側は力の外交に傾斜していく。長引く交渉は漂着民の一人の精神を錯乱させ、自傷行為まで伴ったの決着となった。

一八〇六年、レザノフの意を介して（ただ

し勅令を得ないまま）配下のフヴォストフは樺太の番屋を襲い、番人らを拉致した。翌一八〇七年には択捉島の会所などの襲撃・拉致に及び、帰途の利尻島で拉致者を解放しカムチャッカに戻っていった（番人小頭の中川五郎次は連行）。しかし、外交上の意図に沿った行動とはいえ略奪も伴う蛮行に、ロシア側では勅令なしの乱行としてフヴォストフを処分した。

一八一一年、ゴローニン艦長のロシア船デアナ号は、千島列島測量の途上新水等を求めて択捉島に寄るが、フヴォストフ事件以降警戒を強めていた幕府側は、上陸した艦長以下八名千島アイヌ一名を含む）を捕縛し松前に送った。

一八一二年、副艦長リコルドは国後島で返還交渉に当たっても不首尾に終わり、安否確認すらできなかったことから、近くを航行中の高田屋嘉兵衛船を拿捕し、嘉兵衛らをカムチャッカへ連行した。

一八一三年、八カ月の抑留にも拘らずリコルドと信頼関係を構築した高田屋嘉兵衛の助言が功を奏し、ゴローニン艦長らは二年二月ぶりに解放された。幕府側は松前での拘留中に、馬場佐十郎や間宮林蔵などを面会させ、ロシア語力を強化し国際情勢の認識を深めることに努めていた。

一八〇九年、フヴォストフ事件の現場にいた間宮林蔵は、徹底抗戦を主張していたことが認められて処分を免れ、代わりに樺太探検を命じられた。松田伝十郎配下として、樺太アイヌの協力のもと初めて最北端にまで足を伸ばした林蔵の探検は、従来の半島説を覆した。さらに拠点（フテト）に戻った時、当地のギリヤーク人の交易船に同乗させてもらい、対岸のアムール川を遡り清国出張所（デレン）にまで行っていた。松前に戻ってまとめた『東鞆地方紀行』等は、一八一一年に幕府に提出された。

一八二四年、フヴォストフ事件で拉致されたゴローニン事件の通訳として五年半ぶりに帰国した五郎次は、松前で日本初の牛痘種痘を行った。帰還の途次に手に入れた種痘種痘と種痘現場での見聞を活かしたのである。医書は、一八二〇年、馬場佐十郎により「遁花秘訣」の名で翻訳され、種痘普及の一助をなした。

敗戦後、北海道は未開発資源の宝庫として「ホープ北海道」と期待される一方、サンフランシスコ講和条約から日ソ共同宣言へと先送りされた北方領土問題では今なおその最前線にある。この二〇〇年、蝦夷地・北海道という舞台では、帰国を訴え続けた光太夫、探検を続けた林蔵、択捉航路を切り開いた嘉兵衛、あるいは牛痘種痘に挑戦した五郎次など「未来を見据えた」意志や行動が語り継がれている。北海道命名一五〇年の意義は、戦後開発を経て「互いを認め合う共生社会」へのマイルストーン（北海道HP）として次の一歩を後押しすることにある。

へたけなか ひでやす 旭川大学名誉教授

／（社）旭川ウエルビーイング・コンソーシアム理事